odai

magazine

#15

TRIMING
KURIHARA OSAMU

小台マガジンについて（会話方式）

登場人物：初心者（以降、初）　達人（以降、達）

初「小台マガジンってなんですか？無料なんでしょうか？」
達「はい、オダマガはタダですね。」
初「オダ、はぁ、オダマガというんですね。具体的になんの冊子なんでしょう？」
達「なんでしょうね。ちょっとした情報が色々あって楽しいですよ。コーヒーのお供って感じですかね。コーヒーっぽく言えば。」
初「コーヒーっぽく、ですか。どういった人が書いているんですか？小台の人？」
達「中には小台の人もいますけど、そんなに小台のことも書いてないし小台とはあまり関係ないですね。東京ディズニーランドみたいなものですよ。」
初「なんだかわかったような気もします。ありがとうございます。小台の人じゃないとすると結局のところ誰が書いてるんですか？」
達「寄稿文を募っているのを見たことがあります。でもなかなか集まらないから色んな人にお願いをして寄稿して貰ってるみたいですよ。」
初「そうなんですね。それは大変そう。このくらいだったら自分も書けそうだと思いました。お願いが来てないけど文章を載せたい！という場合はどうすればいいんですか？」
達「そしたら店宛にでも送りつけたらいいですよ。メールで。」
初「え、え、勝手に送っていいんですか？斬新。」
達「送ったら基本的には次号に乗る仕組みと耳にしたことがありますよ。とはいっても実証は出来ていません。私は文才とかないもので読む専門なんです。あ、ROM 専てやつですね。」
初「あら、それは勿体無いですね。絵が描きたかったらそれも OK ですか？」
達「絵でも写真でも、１ページに収まればなんでも大丈夫みたいです。」
初「すごい、太っ腹でなんすね。でもなんで１ページなんですかね？」
達「確かちょっとした空き時間とか移動時間に読めるくらいの長さがいいっていうことみたいですよ。それにしても、もう 15 号ですから大したものだと思いますよ。いつかカラーになるのやら。」
初「15 号、、、ヤバイですね。これはブリュッケでしか手に入りませんか？」
達「出張に行ってるコ本やとかまんまる○とか、OGU MAG なんかでも入手できますよ。」
初「バックナンバーは手に入りますか？というか、毎月出しているのでしょうか？」
達「お店に余っていればですね。でも HP で PDF が見れます。今は二ヶ月に一号を目標みたいです。」
初「なんと、至れり尽くせりじゃないですか。達人さん、小台マガジンのこと、いやいや、オダマガのことがよくわかりました。早速私も何か書いてみたいと思います！ありがとうございます！」
達「いえいえ、近いうちに初心者さんの文章や絵にお目にかかれることを楽しみにしています。」
初「それではよい一日を。」
達「よい一日を。」

おだいにまつわるエトセトラ

小台という場所の断片的なイメージから
小台をイメージするためのコーナーです

夜の小台も好き。店から荒川沿いに出ると、土手も川も空も真っ黒でした。遠くで舎人ライナーがきらきらした光の上を走っていて、それを見ながらぼこぼこコンクリートな土手道を歩いていたら、、小台にまつわる記憶をたどるとわくわくしちゃう、こういう小台が好きなんです。

鈴木由里

商店街を抜けて、都電の線路を越え、小さな橋を渡る。風が強くて、川の間にいるんだと実感して嬉しい。忙しない日々は橋を渡るということが妙に遠く感じる。行けばすぐなのに。近くでも、川を渡ると小旅行のように気持ちが切り替わる。夜の川は特に、どこか違う国に行った気持ちになるんです。

若林亜美

かつてユーフラテス川とチグリス川の間にメソポタミア文明が栄えました。荒川と隅田川の間に小台はあります。町工場が立ち並び、小さなカフェでは様々なイベントが開かれ、川沿いでは多くの人たちがスポーツに勤しんでいます。川と川の間は、往往にして〝文明〟が開かれるものです。筈です。

紺 玄武

最初は、迷い込んだ場所だった。当時自転車に乗ること以外に特にやることもなく、東京をあてもなく徘徊して回っていた冴えない駆け出し会社員であった私にとって、そこは不意に現れたエアポケットのような場所だった。道を越え、線路を越え、川を越えた先の、曖昧でおぼろげな日の記憶。

高橋 弘

橋のはじめにカモをみて
橋のおわりにカモメをみる
川が海へと変わっていくように
ゆたかな時間が流れる
大都会の孤島

大寳 ひとみ

少し緊張してバスに揺られて、10分ほど。橋を渡れば目的地。
バスから降りると、いつか来たことがある町が目の前にある。
でも川の遠くに小さく見える見覚えのない観覧車が、ここは違うと教えてくれます。

近 あづき

甥っ子とわたし

時々FaceTimeで姉からかかってくることがある。と言っても姉と話すわけではなく、画面の向こうには彼がいる。

「おじちゃん、◎※△♪◇○■から見ててー。」

と何か魔法のようなことを言い放ち、こちらの画面には天を映し出して何かしている。こどもはどうしてそんなに見てほしいんだろう。社会性のある生き物の本能によるものなのだろうか。

先日、通い始めたフランス語学校で国立科学博物館で開催しているラスコー展を勧められた。常設で恐竜もあることだし藝大の卒展のついでに寄れると思い甥っ子を連れて行ってきた。

入り口付近の山の形をしたかまくらみたいな作品。中にはしごがあって上から顔を出せる。他の子がやってるのを見て彼も顔をだしてピース。なかなか降りてこないから引きずり出した。

彼のおかげで、展示は全然見ることができなかった。仕方がないからラスコー展に行こうとしたら月曜休館というオチが待っていた。

姉の家と上野の往復の三時間の内、半分くらいは抱っこする羽目になったが、初夏に予定されているペルー登山の体力づくりにはちょうどよかったかもしれない。

日が経ってラスコー展に行ったが結果は同じだった。常設の恐竜ブースでもトリケラトプスが好きと言いつつ目の前にしても帰りたいと言っていた。

128段の階段のうた　11段目

長谷川 至洋

またしても、夏は過ぎ去っていた。夏を見失うまいと目を凝らすことは、サンタさんをこの目で確かめようと眠気に耐え続けるよりもずっと難しい。いくら蝉を捕まえたところで、夏は黙っていなくなるんだから。私は泣いた。でも遠ざかる背中は、振り向けばもう近づいているんだ。

足立区小台とは特に関係のない新年の俳句

去年今年貫く棒のごときもの

中村 安伸

去年今年と書いて「こぞことし」と読ませる。年が改まる瞬間の感慨をあらわす季語である。誰もが正確な時刻を簡単に知ることができる現代においては、午前0時ちょうどをもって年が変わったと意識するのだが、かつては夜明けが年明けのタイミングであり、新しい太陽とともに新しい年がやってきたという感覚をもっていたという。「新年あけまして」という言葉はその感覚に基づくものである。

ただ、掲句の「去年今年」については、緻密な観測と精密な機器によって管理された、現代におけるデジタルな年の移行を考えたほうが相性が良いように思う。

我々の生きる世界を四次元的にとらえたうえで、三次元空間にプロットしたとき、それは過去から未来へと進む列車のような、多数の直方体がひとつに連なった姿に見立てることができる。

その列車に乗り、年が改まることをひとつの車両から次の車両に乗り移るようなものと考えるなら、移動のための通路が必要になる。そして、その通路の形状は内側から見れば筒であり、外から見れば棒である。

以前、同じ作者による「白酒の紐の如くにつがれけり」を取り上げ、液体を固体に喩えたのではなく、時間を止めたのだという主旨のことを書いた。

掲句においても、作者は時間を超越した場に自らを置き、一時停止ボタンに親指を触れさせながら世界を観察しているのである。

作者は高濱虚子（1874年2月22日 - 1959年4月8日）

Pep cycles はじめます

海老根 拓

こんにちは、今はまだ準備中のPep cyclesという自転車メーカーの海老根と申します。たまたまのご縁でこちらに書かせていただくとこになりました。よろしくお願いします。

ブリュッケと出会ったのはtokyobikeという自転車メーカーの谷中店でした。コーヒーが大好きの僕が、前職でもあり今でも好きな自転車ブランドのお店で知り合い、しかもお店は足立区（僕も足立区在住なので）となれば行ってみるしかないと思ったのがきっかけでした。最近は忙しくあまり行けていないのですが、ブリュッケの”美味しければいいんです“というこだわりのコーヒーをいただき、豆を購入させていただいています。

僕は自転車メーカーの人間なので少し自転車の話を書きたいと思います。

自転車ってどこが良いいの？なにが楽しいの？と質問を受ける事があります。自転車をスポーツとして意識し対外的にも自転車が趣味ですと言い始めてからかれこれ30年位経つので僕にとっての自転車は空気みたいな感じなのですが、改めて考えてみると、”風“とか”風景“とか”街の匂い“というキーワードがはじめに出て来ます。なぜか自転車その物はあんまり出てこないんですよね… 僕にとっては自転車その物が楽しいのではなくて、自転車に乗ってどこかへ行って何かを見たり、聞いたり、食べたりする経験が楽しいからだと思うんです。自転車ってたぶんTシャツやスニーカーみたいな存在でそれ自体はありふれた空気みたいな物なんです。でも、肌触りの良いTシャツや履き心地の良いスニーカーを身につけるとなんだか少しワクワクしませんか？その上良い天気だったりして、

さらに何か新しい発見や経験、出会いなんかがあったら楽しさが倍増するのでは？同じようにお気に入りの自転車に乗っていつもより遠くの街に行き新しい発見、経験があったらもっともっと楽しかったり嬉しかったり感動したりできるんじゃないかと思うんです。

どこにでも行けて、何にでもなれ、乗り手の思うようにカスタマイズが出来る空気のような自転車。そんな自転車が作りたくて自転車メーカーを立ち上げました。発売出来るまでにまだ時間がかかりますがもし興味があればPep cycles覚えていただけらた幸いです。

おだいのわたし (13) 16年をふりかえり

中村安伸

昨年はさまざまな活動に初挑戦する機会に恵まれた年だった。

連句の「捌き」に初挑戦したこともそのひとつである。連衆に提出してもらった作品を取捨し、連句一巻をまとめあげるリーダー役を「捌き」という。あるイベントで時間が余ったため私にお鉢がまわってきたという経緯。半歌仙という短縮バージョンではあったが、ベテランの連衆に支えていただき、なんとか完成させることができた。

俳句に取り組みはじめて二十余年にして、ようやく第一句集『虎の夜食』を出版したことも特筆すべきことである。選句と構成をほぼ完全にプロデューサー役の妻にまかせることにした。個人句集においてこのような形態は珍しいが、奇をてらったわけではなく、必然的に選択した方法であるということは、句集のあとがきにも記したとおりである。

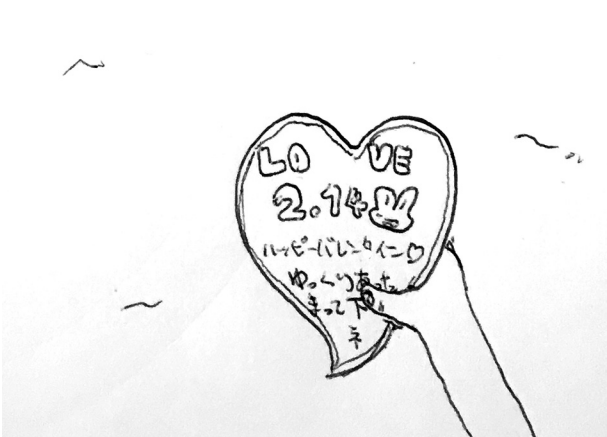
新しいことを行なうたびに、ものごとには経験しないとわからないことがあると改めて思う。

「捌き」を経験してはじめて知った連句の緊張感と楽しさがあった。また、自分が句集を出してはじめて、過去に句集を出した先輩方の思いが伝わったという実感がある。そして、これまで寄贈いただいた句集の重さを改めて感じた。また、一冊の句集という単位で作品を評価される責任感と喜びを今感じているところである。

初挑戦とはいえないが、日本文学を歌曲と朗読に翻案・演奏するユニット「汀の火」では『夢十夜』『檸檬』の二作品を制作し、東京、京都で三回のライブを行なった。一昨年の『死者の書』のときとはそれぞれに異なるアプローチを試すことができた。私の句集も、このユニットも、派手ではないかもしれないが、これまで誰もやってこなかったことをやっているという実感がある。

一方、残念ながらさまざまな事情で休止することになった活動もあった。

今年の計画表には、あらくれ句会の再開、第一句集の出版記念イベント開催、「汀の火」の新作、そして『虎の夜食』と表裏一体となる第二句集の制作など、多くの項目がすでに並んでいるが、いくつ実現できるだろうか。



ある日の夢　２０１６年１２月３日

鈴木さんに競歩みたいな歩き方モードがあって切り替えてた。肘をがんがん当ててくるから痛かった。「おれがカッコよければそれでいいんです。」とゆう結びには「なるほどー」と思っていたけどどうゆうことだろう。

法政大学は明日のパーティのために忙しそうで、バロンさんという社長は欠席とのことです。

映画のこと

君の名は。

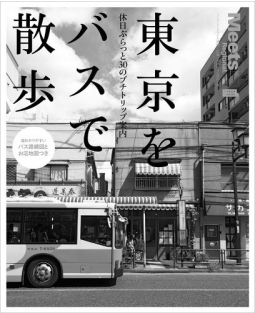
2016年　日本
監督・脚本　新海誠

どこで見たんだろう。どうしてかわからないけど見たくなって久しぶりに映画館に行った。予告が流れている時間に凄急いでポップコーンを食べていたからTOHO CINEMASだと思う。朝に思い立って行ったとなると西新井か。
舞台となるのは糸守という架空の町、糸守。飛騨高山がモデルらしい。いわゆる田舎という感じで個人的には窮屈そうないい町に思えた。
引き戸が閉まる描写。話の転換か、それとも意識の転換だろうか、どちらでもない気もするが、何らかのタイミングで引き戸が場面を切る。だから開く描写はない。開き戸は冒頭で一度だけ。引戸って種類があるんだなということを認識できて建具屋さんとか扉屋さんはテンションあがるのかもしれない。
作画が凄かった。紐を編む部分とかあの空間の描写の細かさに、美しいなぁと感じた。物語の核となる部分(だと思う)には関心はないが、序盤のテンポの良さで気持ちよく引き込まれて見終わってからは実写だったかどうかも危うかった。
ちょうどこの映画を見にいく日の朝、知らない町にいる夢を見た。映画の内容は見るまで何も知らなかった。「谷村道」という名前をgoogle mapで目が覚めて探していた。どんな夢だったかはこの文章を書きながら既に覚えていないけど、シンクロニシティのようなものがあった。
歳を取って涙腺もゆるくなっていて序盤で恐らく誰も理解できない涙を流した。結局、涙したのはその弁当を分けてもらうシーンだけだった。これから見る人は是非その部分に注目して欲しい。
観月ありさといしだ壱成のドラマ「放課後」を思い出した。
ギンレイ・シネマクラブ、今年も今のところ入会する予感がない。

バスが東大農学部前を通るその時

長谷川 至洋

インディアンサマーのある日のこと。ぼくは都バスの旅に出ています。小台からお茶の水までの旅の途中で、東大農学部前を通りました。午後2時。風もなく、東大農学部前は平和です。古い建物と新しい人たちの街。ぼくは古いものも新しいものも、どっちも好きだなあ。なんだかこの土地でなら適度に生きていけそうだ。そんなふうな思いを急速に深めたぼくはここで降りて、これから先は東大生のふりでもして毎日を過ごしてやろうと思いながらあと一歩のところでボタンを押し損ねたままお茶の水へと揺られました。理由はよくわかりません。ただ確かなのは、都バスの旅は座りながらにしてつかの間人生を遊ばせることができるということです。夏の朝でも、冬の雨でも、バスは人を乗せ、東大農学部前を通っています。



バスというのは凄くて、小台から御茶ノ水や東京駅に行けたり、王子からは高円寺にも行けたりします。バスを知ることこそが東京を知ることのような気がします。ブリュッケも載せて頂いてるので是非買い求めて東京を散歩してみてください。

東京をバスで散歩／京阪エルマガジン社

Topics

・昨年末から王子にある楽しい古本屋のコ本やプロデュースの出張本棚が始まりました。こちらの本は購入いただくと、しおりにもなる素敵スリップをゲットできます。

・トランプさんが大統領になりました。日本でもマスメディアが彼を批判をしているのをよく見かけますが、就任10日足らずで支持率は50%です。その数字に至るまでブッシュさんもオバマさんも1000日前後かかっています。これはいったい何を意味しているのでしょう。安倍さんもお手上げです。

・福島の原発二号機の放射線量がすごいことが発覚しました。そしてまた忘れられます。人間の生活とはいったい何なんでしょう。

・無印良品がコーヒーマシンを発売しました。有楽町店なんかを見るとやたらコーヒーに注力しているように見受けられます。

聴いた音のこと

おこがましいかもしれませんが、こうゆうコーナーをやってもいいのかなと思い始めてみます。はじめての今回は昨年末に発売された池間由布子さんの「明るい窓」についてのことを書きたいと思います。

池間さんの存在を知ったのは店を始めた2014年の年末のことでした。存在と言っても、人がメモ紙に書いた字だけ。歌を聴いたのは2016年の高円寺での「発」でのこと。ただ、この時は後半から入ったからか、カバー曲中心だった。CD（「しゅあろあろ」）は買ったものの、生でちゃんと聞いたのは10月の亀戸スタジオが初めてでした。池間さんはインターネット上にいないからなかなか情報も受け身では入ってこないので、嬉しい偶然でした。亀戸スタジオに入っている人たちの作品の中で歌う池間さんの構図は「ひっそり橋」と重なって不思議な気持ちでそこに居合わせました。

池間さんが歌う姿は、歌がとても似合うと思っていた人が持っていたそれを持っていたので、楽しくなって帰ってから「しゅあろあろ」を聞き直して「拝啓、朝」をギターでなぞって歌う日々がしばらく続いたのでした。

さて、本題の「明るい窓」を入手したのは年が明けてからのこと。聴いてみて、「しゅあろあろ」で自分の中に池間さんの曲像が勝手に出来上がってしまっていたことに気づく。きっとこれがディープラーニングというやつだろう。予想外というか、そういった奥行きがあることは予想外ではないのだけど、ギターでの表現の幅が広がっているというか、そうゆうことを思ったりした。詞も楽しい。いったい何が人になっているんだろう。いや、人だろうか。そもそも人かもしれない。ちょっと出かけるのもなかなか腰が重いけども、簡単に行ける場所があることもわかった。なんだか届きそうで届かないところにある言葉たちがあちらこちらで聴くほどに世界が見えます。音も言葉も、冬の午後に窓から射すやわらかいひかり中にいるような音楽と感じました。

3月20日の春分の日にはなんと、ブリュッケにて池間由布子さんのライブ「春だ。」が開催されるので是非足を運んで聴いてみていただきたいものです。

池間由布子「明るい窓」
1800円＋税
高円寺円盤などで購入可

橋の渡りかた

朝早く目が冷めたら思い切って布団から出てみましょう。晴れていたら近所を散歩すると普段と違った景色を楽しめるかもしれません。

タクシーを見かけたら手を挙げてみましょう。あなたを目的地に連れて行ってくれます。ちょっとそこまでなら410円になりました。

いらなくなった本は古本屋に持っていきましょう。ちょっとしたお小遣いになるかもしれませんし、本も誰かに読まれるかもしれません。

毎日が退屈だと感じていたら、何か取り返しのつかないことをしてみましょう。取り返しの付かないことをしてしまったと思うはずです。

世の中が嫌になったら思い切って遠くに行ってみましょう。きっと世の中のことなんて何も知らなかったことに気づくことができます。

凧揚げは風のある日にやりましょう。揚がらないのを風のせいにすることはできますが、風があったほうがやっぱり雰囲気があります。

新しいことを始めるときには、何かをやめてみましょう。ついついやることを増やしてしまって生活がおざなりになることを防げます。

桜餅を見かけたら買って食べてみましょう。ニッキのうっすらとした香りと柔らかな甘味に春を感じられます。和装をすると尚良し◎

気になっているお店には足を運びましょう。同じ嗜好性の人に会えるかも。うかうかしているとなくなってしまうかもしれません。

わからないことがあれば人に聞いてみましょう。それでもわからなければ自分で調べてみましょう。きっとその後の人生に役立ちます。

店のあれこれ

週末の午前中を有効に使ってみようという趣旨で「ゆたかな休日」ということをはじめました。今のところ、「しゃべっチャイナ！」という中国語講座を隔週くらいのペースでやっています。クリスマスには刺繍のワークショップも行い、年始にもギリシャ語入門編や、凧を作って土手で飛ばす会などやりました。色々なことを休日の午前中にできたらいいです。店主も私生活でフランス語を再開し、学校にも行き始めたのでフランス語をやってみたい人には教えられたらと思います。希望者がひとりでもいれば隔週くらいで土日のどちらかの午前中に開講します。やりたいという方がいらっしゃいましたらお声がけください。また、自分も何か教えたいという方もいらっしゃいましたらご相談ください。

それとは別でパソコンのものも今年はやります。手始めにSonic Piというプログラミングで音楽をやるやつのプレ勉強会を3月11日にやります。営業時間中なので6人まで。やってみたい方はなるべくご連絡の上参加ください。「橋音速円周率の会」です。

最近は小台の外でも動こうということで出張先を探しています。現在は王子のコ本やに毎月第2木曜日に出張させていただいています。それに加えて、3月からは水曜日に、うちの豆袋にボコッと印刷をして頂いてる活版印刷のまんまる○の軒先で出張コーヒーの予定です。「小台は遠いからなぁ」と思ってた方はこの機会に是非いらしてください。いろんなところでコーヒーを出せると楽しいので、こちらもお気軽にお声がけください。手作り市にも参加したいと思っています。2月は習っている和太鼓の発表会と重なるため出店できない事態となりました。次のタイミングにはと思います。ちなみに発表会の26日ですが、この日はある方が代打で店に立ちますのでメニューが限定されます。

その他、「語る」は1、2月と休んでしましましたが、3月4日に福田トオルさんにハロプロ語っていただきます。展示も今年もやっていきます。今年はじめの展示は3月8日〜20日で坂本優子さんの展示「森を巡る」です。兵庫県よりいらっしゃいます。最終日は池間由布子さんのライブです。その次の週からは3月30日〜4月9日には小瀬古智之さんの展示です。そちらの会期中にも何かと催せたらと思います。どうぞ遊びに来てください。

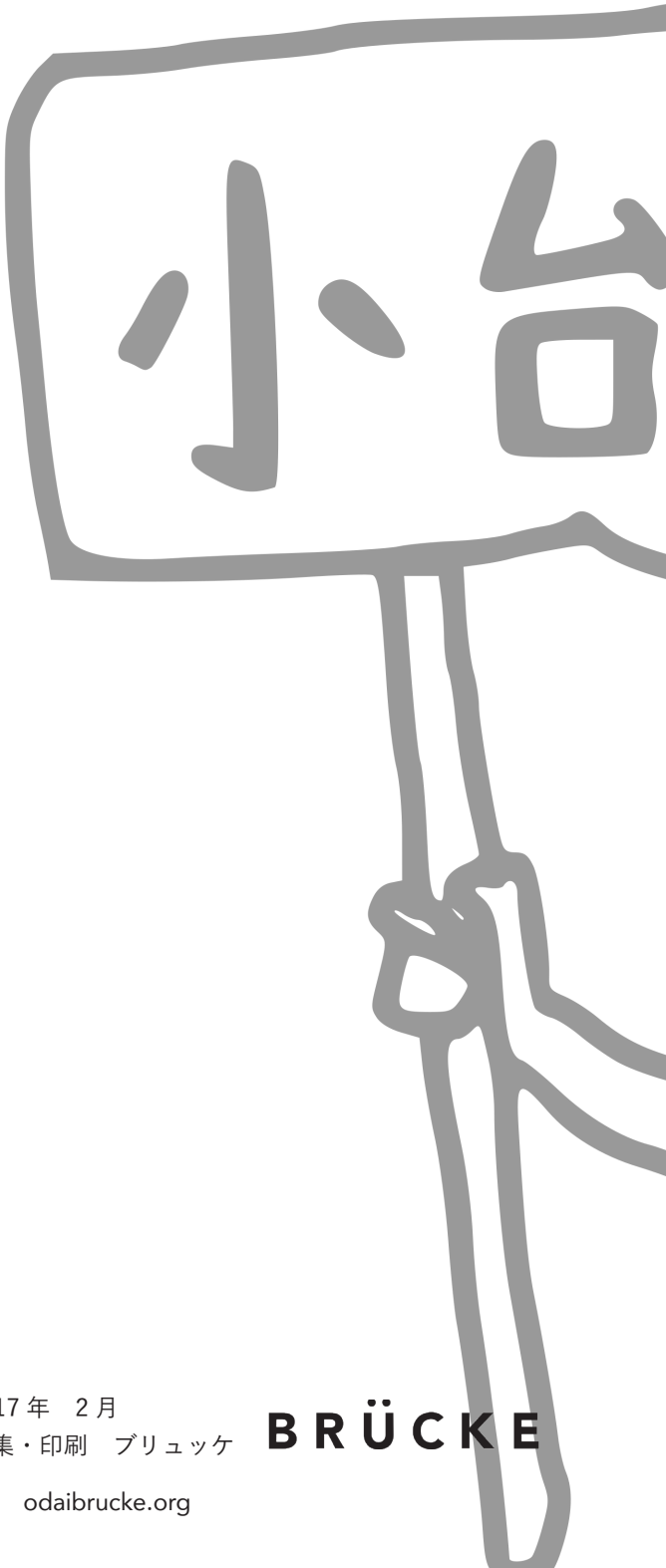
今回の店のあれこれはこんなところでしょうか。いや、店のことに触れてませんでした。コーヒーパスポートというお得なシステムを始めます。あと豆菓子がメニューに加わりました。そんなところでしょうか。何かあればHPにあげたりするので、暇な時に思い出したら見て頂けたらと思います。

http://odaibrucke.org

小台マガジン 15

海老根 拓
大寳 ひとみ
栗原 論
近あづき
紺玄武
鈴木由里
高橋弘
中村安伸
長谷川至洋
若林亜美
杉浦俊介（店主）

今回も色々な方にご寄稿いただきありがとうございました。編集に時間がかかり入稿が遅れましたが、なんとか今回も作ることができました。
名前のないものは杉浦です。つまりそのくらい付け入る隙きがありますので、何か書きたいという方はお待ちしております。



小台マガジン vol.15

2017 年　2 月
編集・印刷　ブリュッケ

BRÜCKE

odaibrucke.org